

注解『七十一番職人歌合』稿(十一)

下 房 俊 一

凡例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第二十五番および第二十六番の注解を収めた。

二十五番 琵琶法師 女盲

【職人尽】

〔十二番本 東北院職人歌合〕五番右 盲目

さくれとも手にもさはらぬ月影のさやけき夜半をかそへてそしる

……右哥、心詞艶にして、よく／＼和哥の道をしれり。藤原範永か山家月の哥にもはつへからず。依右可為勝。かくはかりねりちかひたる恋路には河原にまよふこゝちこそすれ

……右、先心催一興。勝劣不分明。為持。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕十一番右 座頭

月影のさゆるもしらすめくらきは秋のものうき涙なりけり

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕盲目 ことわりや杖を突きつつ行く座頭さこそは夜の溝はつらけれ 〔職人絵合詩〕五番右 盲

注解『七十一番職人歌合』稿(十一)

目 三光五色悉難知 賀々街頭杖子隨 縱是冥行空摘埴 莫騎瞎馬向深池 「古今夷曲集」 題しらず 座頭衆涼みとなれば酒盛りのてうしを請けて平家語れり△淡路守宗増▽ 「訓蒙図彙」 瞽者こしやめくら、盲也まう。瞽女こどをんなめくら。偏瞎へんかくかためしひ。偏目同。清盲せいまうあきじひ。〔人倫訓蒙図彙〕座頭 初心、打掛、四分、勾当、檢校、何れも官なり。行長、平家物語作り教へしは、生仏といふ座頭なり。誠に高位に交わるものなれば、心直すなにありたきもの也。聞き伝へしは、逢坂の蟬丸、又は景清、日向、勾当といひしとかや。初官より段々の官あり。石塔二月十六日、涼み六月十九日なり。檢校入用、凡そ四拾貫目余なり。

御前 光孝天皇の御子雨夜の前に始まるといふ説あり。これも歴々の奥方へも出で入り、又は、いとけなき娘子に琴三尾線を教へ待れば、身持ち華奢にありたきものなり。〔和国百女〕女の盲目は、三味線、琴の芸も知らざれば、上つ方の慰みにもならず。類をもつて友を集むるものなれば、こやかしこにござりゐて、かなたこなたいろいろの寿を聞きつけては、大勢催して門外に立ちやすらひ、祝ひの禄物をたべと乞ふ。いかなる吝虫しんちゅうも、祝言しよげん又は髪置き、帯解き、袴着、元服などときは、金銀米錢などを与ゆるなり。〔誹諧職人尽〕びわ法師・女めくら 目に見えぬ風は座頭の涼み哉△宗静▽ 新琵琶はただそげそげの時雨哉△氷花▽ 何人の戻す坐頭ぞ小夜しぐれ△珪琳▽ 琵琶法師調子にのせる落葉哉△景湘▽ 春待つや別当の坊の琵琶の音△寥和▽ 初午や琴柱に並ぶ稽古宿△二世 調和▽ 紅梅やりんと親ある琴の音△喬谷▽ 提灯で瞽女の送りや今日の月△茶外▽ 狂ふなよ冬の調への松の声△旦調▽ いとゆふや女盲の忍び駒△草也▽ 雨の花淋しや瞽女の後ろ帯△寥和▽ 〔職人尽発句合〕十番右 盲法師 涼しさによい月影を空に知る めくらき法師が何がし殿の納涼に召されて、薫れる風に月のさやかなるを知れる、くまなき心の働き有りてむ。勝にこそ。 「此の涼みに檢校殿は何を語らるるやらん」

五十四番左 瞽女 覗かれて面伏せなり百合の花 百合の花の面伏せなる瞽女が姿、よく映りしや。…：勝負いづれとも申しがたく、持にこそ。〔職人尽狂歌合〕琵琶法師 撥をもてこれをも招け琵琶法師月は入るさの山ほととぎす …：右、橋姫の巻に、これしても月は招きつべかりけり、とある詞を取りて、一首の趣とせられし。たけ高く、巧み言ふべうもあらず。此の番ひ、いづれもけしうは侍らぬ中に、右ことさらにやすらかに聞こえて侍れば、勝と定め侍りつ。／ 琵琶法師 琵琶法師平家はよそに郭公月の都を落つるかと思ふ 左、琵琶さし置きて声にめづるさまよろし。都を落つるかと思ふ、平家の都を開かれしによそへられし、甘心少なからず。…：左の琵琶法師聞きどころありげなれば、勝つべくや。／ 琵琶法師

おのが目のあかず聞かばや郭公まさぐる琵琶の半月に鳴く……右、心詞優にして、尋常の体に待らず。琵琶の半月、返す返すおかし。勝たるべし。／ 盲御前 影見えぬ盲御前さへ三味線のひつたて耳に聞く子規……右、四の句、狂じたるさまよるしく侍れど、勝の字は左に記すべくや。〔江戸職人歌合〕二十四番左 座頭 名に高き望十六夜の此の秋は四度まで晴る葉月長月 左右共無三申旨。判云、四度まで晴るは、其の道にとりて頗る規模とする事なるべけれど、上の句に職分の寄せなくて遺憾なり。其の上、長月は十三夜こそ名も高く待るを、望、十六夜は思ひの外にや侍らむ。右哥……猶可勝歟。

よそながら見ても心は慰まん恋は盲ぞ猶勝りける 左右共申感心之由。判云、左右ともに心深き哥なるにとりて、左は下の句平懐なり。右ぞ勝り待るべき。〔近世職人尽絵詞〕 檢校 同じめしひといへども、官金の多少によりて高き賤しきを分かつことは、同じ三絃の音締めに上手下手を分かつといふにはあたらで、其の運にもよるべくや。同じ竹にして花生けとも成り、紙屑籠ともなれるが如し。「住吉檢校うしへ、宝の市御礼申し上げ候ふ」〔難波職人歌合〕 下九番右 瞽女 目に見えぬ糸の三筋も手触りにひかるるものよ人の心は 左の方人云、糸の三筋とはさみせんの琴なるべし。四つの緒とも六つの緒とも、あるは七つ緒や八つ緒などこそ、古くは詠みたれ。むげに近き世のいやしき物を云へるは聞きよからず。且つ、めしひなれば手触りにて糸筋を知るはさる事ながら、下の心聞こえがたし。右方答、今まさに弾く物なれば、殊更にさみせんの琴を云へるなり。又、目に見ぬ人を手触りにて恋ふる心なるを、得聞き知らずや。判に云、……右の歌、手業も恋も、此の歌主はさこそと聞こえて、あはれ深し。歌もわるからねど、猶左の方こよなう言ひ勝れば、勝とす。

【本文】

廿五番

ねさめしてあなおもしろといふこゑに
月さゆる夜をそらにしる哉
つきかけのさゆるもしらすめくらきは
秋のものうきなみたなりけり

ねさめー〔類〕ね覚 おもしろー〔類〕面白 こゑー〔類〕声
夜ー〔類〕よ そらにー〔類〕空に
つきかけー〔類〕月影
ものうきなみたー〔類〕物うき涙

左は、目のみえぬ事をよせいにてよめり。右は、めくらきとよせたる心はせ、ともにあはれにきこゆ。可為持。

吹かせのめに見ぬ人のこひしきをのきはおふるまつときかせよ
いかにしてさのみたつ名をおうつゝみ
かしらうつまで恋しかるらむ

左は、古歌のことはあまりになかくきこゆれと、うたからあしからぬにや。右は、おほつゝみに、かしらうつといふ事侍にや。されと、いやしく聞ゆれは、まけ侍へし。

◇ 琵琶法師

あまのたくもの
夕けふり、尾上
の
しかの暁の
こゑ

女めくら
宇多天皇に



あはれに―〔白〕あはれ

かせ―〔類〕風 見ぬ―〔類〕みぬ こひしき―〔類〕恋しき
のきは―〔類〕軒は

おうつゝみ―〔忠〕明 おほつゝみ―〔類〕大鼓

恋しかるらむ―〔類〕恋しかるらん

ことは―〔類〕詞 きこゆれと―〔類〕聞ゆれと

うたから―〔類〕歌から おほつゝみ―〔類〕大つゝみ

事―〔類〕こと

あま―〔白〕〔忠〕阿士

夕けふり―〔白〕〔忠〕夕煙〔類〕ゆふけふり 尾上―〔類〕おのへ

しか―〔白〕〔忠〕廉

こゑ―〔白〕〔忠〕声

女めくら―〔白〕女盲〔忠〕女盲〔類〕女盲

十一代のこう

るん、

い□うか

ちやくしに、

かはつの三良

とて

こうるんー〔白〕〔忠〕〔類〕後胤

い□うー〔尊〕〔明〕〔類〕いとう〔白〕〔忠〕伊藤

ちやくしー〔白〕〔忠〕嫡子

三良ー〔類〕三郎

【語注】

◎琵琶法師は、主として平家物語を琵琶の伴奏で語った僧形の盲人。

「をんなめくら」という語は、中世の例は管見に入らないが、『訓蒙図彙』に「瞽女、をんなめくら」とあり（「瞽者」の項）、『誹諧職人尽』前集に、「いとゆふや女めくらの忍び駒」という草也の句を揚げる（「びわ法師・女めくら」の項）。中世末ごろから「御前（瞽女）」と呼ばれた盲目の女芸人のことと考えてよからう。謡曲「望月」で、安田友春の妻が敵に近づくため、「今ほどの宿にはやる」「盲御前」を装って、「一万箱王が親の敵を討つたる所を歌」うことから、曾我兄弟のことなどを歌っていたらしいことが分かる。また、虎明本狂言「ごせざとう」に、「瞽女は鼓を叩いて歌を歌ふ」とあることから、三味線渡来以前は、鼓を打ちながら歌を歌っていたらしいことも窺われる。本職人歌台の絵でも、大鼓を打ちながら、曾我物語らしい一節を歌っている。

十二番本『東北院職人歌台』五番右に、「盲目」が登場する。

◎ねさめしてあなおもしろといふこゑ 隣人か誰かが、寢覚めして、月の美しさに「あな、おもしろ」と感嘆の声を上げたのである。

◎ぞらにする 「空に知る」は、暗に知ること。直接目で見ることができないが、「あな、おもしろ」という人の声によって、月の冴えた夜であることが分かった、というのである。「空」は、「月」の縁語。なお、ややこれに似た歌

に、「唐衣打つ声聞けば月清みまだ寝ぬ人を空に知るかな[△]貫之[▽]」(新勅撰集、五、秋歌下)がある。

◎つきかけの…… 『飛鳥井雅康 職人歌』十一番右、座頭の歌に同じ。

◎つきかけのさゆるもしらすめくらきは 「めくらし」という語は、中世の例は管見に入らぬが、『職人尽発句合』十番右、盲法師の句の判詞に、「めくらき法師が何がし殿の納涼に召されて」云々とある。名詞「めくら」を形容詞化したものであろう。月影の冴えているのも知らず、目が見えないのは。

◎秋のものうきなみたなりけり 秋の物憂さに流す涙のせいであつた。実際には、もともと目が見えないのであるが、それを涙のせいであると見立てたのである。

◎目のみえぬ事をよせいにてよめり 「よせい」は、「余情」(歌論用語で、言外に漂う微妙な情趣)で、ここは、目が見えないということを直接表現しないで、「あなおもしろといふ声に月さゆる夜を空に知る」と暗示したことについて言うか。ただし、「余情にて」という用例は知らない。

◎めくらきとよせたる心はせ 盲目の意を響かせながら、涙で目が見えないことを「めくらき」と言ったセンス。

◎あはれにきこゆ 白石本は「に」を脱す。「あはれなり」は、しみじみとした情趣のあることをいう歌論用語であるが、ここでは同時に、琵琶法師、女盲に対して憐憫の情を催す、ということを行っているのであろう。

◎吹かせの…… 「世の中はかくこそ有りけれ吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり[△]貫之[▽]」(古今集、十一、恋歌一)を本歌とする。

◎吹かせのめに見ぬ人のこひしき 風が目に見えないという発想の歌は、著名な「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる[△]敏行[▽]」(古今集、四、秋歌上)を始め、数多い。吹く風が目に見えないように、目に見ぬ人を恋しく思うこと。ただし、「目に見ぬ人」は、本歌では、会うことのできない人の意で用いられているが、こゝは、盲人の歌だから、文字どおり、目で見ることができない、というのである。本歌の言葉そのまま用いながら、即物的な意味を含ませたところがおもしろい。

◎のきはおふるまつときかせよ 軒端に生えている「松」のように、軒先に出て「待つ」と相手に伝えてくれ。

「松」に「待つ」を掛けるのは、著名な「立ち別れ因幡の山の峰に生ふる松とし聞かば今帰り来む△行平▽」（古今集、八、離別歌）を始め、しばしば用いられる技法。「松」は「風」の縁語。また、「聞かせよ」も、「風」の便りに聞かせよ、という気持ちであろう。

◎いかにして　すぐ下の「さのみ立つ名を負ふ」と、下句の「頭打つまで恋しかるらん」の両方にかかると見てよからう。

◎さのみ立つ名をおうつゝみ　（相手がつれなくて会うこともできないのに、どうして）噂ばかりが立つのだろう、の意の「さのみ立つ名を負ふ」から、「大鼓」と続く。

◎かしらうつまで恋しかるらむ　「大鼓」から「頭打つ」と続く。「頭（を）打つ」は、太鼓や鼓の打ち方で、出だしを強く打つこと。「鼓、其の謡のやうに打つべし。京懸は刻みに力を入れて頭のごとし。又、程を置き候て後に頭を打つ事、今はやり物也」（禪鳳雑談、中）、「いや、繩を付けて締め付けて、頭かしらをちやう／＼と打たるゝは、鼓かや、是害房／＼」（梅津家本『是害房絵』）などの例がある。それに、頭がずきずき痛む意の「頭（が）打つ」を言い掛ける。この用例には、「何レモ訳モ聞へヌヲカシイ田舎節ヲ歌ウホドニ、聞クモカシラガ打ツゾ」（長恨歌琵琶行抄）や、近世のものであるが、「胸が悪ふてかしらも打つ」（雪女五枚羽子板、下）などがある。ここは、頭がずきずき痛むほどに恋の思いに悩んでいるのである。「頭（を）打つ」という言葉も、もとより雅語ではないが、それに「頭（が）打つ」という卑俗な言葉を言い掛けた点が面白い。つれない相手であるのに、どうして自分はこんな恋の思いに苦しむのであらう、という気持ち。

◎古歌のことはあまりになかくきこゆれと　「古歌」は、「世の中は……」という本歌をさす。その本歌の言葉あまりに長く取り過ぎているように思われるが、「此のうちには、み山もそよにさやぐ霜夜、すくもたく火の下こがれ、しぢのはしがき、伊勢の浜荻、かやうの歌を本歌に取りて新しき歌に詠めるが、まことによるしく聞こゆる姿に待るなり。是より多く取れば、わが詠みたる歌とも見えず、もとのままに見ゆるなり」（近代秀歌）、「取古歌詠新歌一事、五句之中及三句二者頗過分無珍気」（詠歌大概）、「本歌の詞をあまりに多く取る事はあるまじき事にて候ふ」

(毎月抄)などのように、本歌の言葉も多く取り過ぎることはよくないこととされていた。

◎おほつゝみに、かしらうつといふ事侍にや 判者は、「頭(を)打つ」という言葉を知らなかったと思われる。本職人歌合の成立事情について、具体的なことはほとんど分っていないが、このような判詞を見る限り、少なくとも、歌の作者と判者とは別人であったと思われる。

◎いやしく聞ゆれば 「頭(が)打つ」という言葉について言うのであろう。

◎琵琶法師 忠寄本は、「廿五番琵琶法師」とあるべきところ、前の二十四番右「煎し物売」に、「廿五番煎し物売」と誤り記す。

◎あまのたくもの夕けふり、尾上のしかの暁のこゑ 『平家物語』七、福原落の一節。「海人のたく藻の夕煙、尾上の鹿の暁のこゑ、渚々によする浪の音、袖に宿かる月の影……」(日本古典文学大系本Ⅱ覚一本系による)。平家一門が福原内裏に火をかけ、安徳天皇を奉じて西海に漕ぎ出す場面。琵琶法師が語っているのである。

◎宇多天皇に十一代のこうゑん、い□うかちやくしに、かはつの三良とて 『曾我物語』の一節と思われるが、現存の諸本には見当たらない詞章。替女が歌っているのである。「い□う」は、他の諸本、「いとう」ないし「伊藤」。伊東二郎祐親のこと。「河津の三良」は、その嫡子祐重のこと。奥野の狩での相撲で、俣野五郎景久を負かしたが、帰途、工藤祐経の部下に暗殺される。

【絵】

琵琶法師は、剃髪し僧衣を着、琵琶を弾きつつ平家物語を語る。前に、ずたけ凶竹(律管)と一節切。ひとよきり凶竹は調律に用いるが、一節切の用途は未考。横に、杖に通した下駄。亡くさないための工夫である。

女盲は、小袖に打掛を羽織り、大鼓を打ちながら、曾我物語らしい一節を歌う。横に、杖に通した草履を置くのは、琵琶法師同様。草履は板金剛か(二十一番語注「いたこんかう」の項参照)。

【参考】

○ 絵を語り比巴弾きて経る我が世こそ憂き目見えたる言なりけれ

……右歌、琵琶弾きて経るといへる二の句こそ、にほひなく侍れ。平家は入道の姿にて盲目なり。絵を解くは、俗形にて、離妻が明をおもてとして、しかも四絃を弄せり。しかるに、絵を語り、比巴弾くといひ、憂き目見えたる言といひて、自他の所作をよく詠み分けたる、心深く聞こゆ。

(三十二番職人歌合、十七番右 絵解)

○ 座敷のうちに食ふは饅頭

平家にや多田の行方を語るらん

(竹馬狂吟集)

○ 目くらは熱湯好むなりけり

痒瘡を搔く一方の昔より

(同)

○ 足もとを聞けば平家の流れにて

難波の浦を走る小座頭

(犬つくば集)

○ 座頭の房の秋の夕暮

細杖をさぐりさぐりも月出でて

(同)

○ うそを吹くこそあはれなりけれ

座頭が百足に刺され痛がりて

(同)

○ 平家語らぬ座頭ありけり

今宵しも源氏の方に宿借りて

(同)

○ あぶなかりけりあぶなかりけり

座頭の二人連れたる一つ橋

(同)

○ ここに河津の三郎が子に一万箱主とて、兄弟の者のありけるが、五つや三つの頃かとよ、父をいとこに討たせつ、

すでに日行き時来つて、七つ五つになりしかば、幼いとしげなかりし心にも、父の敵を討たばやと、思ひの色に出づるこそ、げにあはれにぞ覚ゆる、ある時おとといは、持仏堂に参りて、兄の一万香を焚き、花を仏に供ずれば、弟の箱王は、本尊をつくづくと目守りて、いかに兄御前聞こしめせ、本尊の名をば我が敵、工藤と申し奉り、劍を提ひきげ繩を持ち、我等を睨んで、立たせ給ふが憎ければ、走り掛かりて御首を、討ち落とさんと申せば、兄の一万これを聞きて、いまいまし、いかなる事ぞ仏をば、不動と申し敵をば、工藤といふを知らざるか、さては仏にてましますかと、抜いたる刀を鞘に差し、許させ給へ南無仏、敵を討たせ給へや
(謡曲「望月」)

○座頭一人出て、清水へ参る。又、警女も籠もる。互ひに法楽。せれふふしよろづのたふの土首、／＼、妻戸のなきぞ悲しき。我が世の中は真つ黒に、／＼、目のなき事ぞ悲しき。ことはさて順逆に下向する。ふしやがて杖にて推したり。こせこなたも杖にて推したり。ただ今ここにて合ひ申す、在所はいづくの人やらん。

我が名を何と明石瀉、恨むべき人もあらばこそ。さて主なき放れ駒、清水寺に参籠せし人か。わらはも今夜の夢想の告げ、忘れがたくぞ覚へたる。互ひに夢想の末とげて。まことに笑みの中なれども。同千束立てにし錦木の逢わで朽ちにし世の中に、時をも移さづ夫婦となるぞ嬉しき。警女の手を取りて帰る。

(天正本狂言「こせさとう」)

○腹の立つ事じやト云テ、又平家を語る。太郎冠者が悪ひ事を平家に語る。節の面白いところではそちを見うほどに褒めいと云。

(天理本狂言「見ずきかず」)

○してやがて身どもが検校になるほどに、われを公当になさうぞト云。忝いと云。平家を稽古せいト云。申してみれ共なりかねますト云。して一句語つて聞かせうト云テ、抑一の谷の合戦破れしかば……

(同「どぶかつちり」)

○罷り出でたる者は、此の辺りに住まゐるする勾当にて候ふ。やがて涼みの参会に参るが、我らをば検校連のかはゆがらせらるる。平家の一節も語れと仰せらるる程に、いつも琵琶を持たせて参るが、此の間四の糸を切らひてござる。爰にいつも出入りいたすお方の御さるが、見事な琵琶を持たせられたほどに、参つて借りて参らばやと存ずる。

○われららにおいては、高貴の人びとはヴィオラを奏することを誇りとしている。日本では、ヨーロッパの手廻し風サンフオニ琴キタを弾く人のようにそれは盲人の仕事（琵琶法師）である。
（日本覚書、八）

○われららにおいては、盲人はいとも平和愛好者である。日本では、非常に喧嘩好きであり、杖や脇差ワキザシを帯び、そしてたいそうちやほやされている。
（同）

二十六番 仏師 経師

【職人尽】

〔五番本 東北院職人歌合〕判者 経師

いまさらになにさやけしとおもふらむすりかた木なる秋の夜の月

〔十二番本 東北院職人歌合〕二番

左 仏師

ささみおくみそきあらはす月すめはひとへはくひくこちこそすれ

右 経師

ちひはてゝ文字かたもなきすりかたきこよひの月そあらはかさはや

左哥、風情よろしく侍り。但、きさみたらんみそきにはくひきたらんは、けに／＼しからすや。かねてはくひく事や侍るへき。右、月をほめたるたより、さもと覚侍り。哥すかたもことの外に左にはたちまさりてきこえ侍り。

仍為勝。

左

あふ事はかたゆかみなる居仏のなき名をたにもたゝはこそあらめ

右

おもひあまり露の夜すからうつかみのおとにたてゝも人をこはゝや

左哥、逢事はかたしとつゝけんために、よしなき仏をゆかめてよまれたる、聊罪深くや侍らん。右哥、思ひあまり露の夜すからうつかみとつゝけられたる、けに／＼しからすや。思ひあまるましき紙にや侍る。おもひあまるとよますとも、うちてはかくや玉章のとも、たつる錦木共あらはこそ、其言葉の詮にては侍らぬ。左哥、今すこし聞所あり。仍為勝。

〔飛鳥井雅康 職人歌〕 十二番

仏師

しはしまてつくりかけたる木ほとけの光そふへき夕暮の月

経師

かまくらやきやうしかやつのも月見れば浦山かけてすみわたるかな

〔伝鳥丸光広作 職人歌合〕 仏師・経師 立居さへ檀那まかせの尺迦阿弥陀人をばいかで送り迎へむ 摺りをける経をも人の召さぬ間は頭を提げ槌の紙や打つらん 〔職人絵合詩〕 二番 仏師・経師 種好形相群品分 優填雕刻昔曾聞 民間誰識百工外 更傲胡風運斧斤 梵文翻譯到支倭 刀尺安排又削摩 世上瘡疣須拭却 堆々葉々貝多羅 〔古今夷曲集〕 職人歌合の中に仏師恋 恋をして片手に造る御仏を拝む衆生や皆迷ひなん 〔民部少輔嘉隆〕 〔長崎一見 職人一首〕 十五番左 仏師 またも見ん事ありがたき花盛り造る仏も我が目の中に 左、またも見んことありがたしとの無常を起こされし事、仏師に似合ひて、あはれにやさし。されども、言葉続きくだくだにこそ侍れ。……判者が心も数珠の花房（右歌）に引かれ、心に袖を濡らし侍れ。〔後撰夷曲集〕 仏師の箔使へる折から、本尊は何にかと問ひ侍るに、阿弥陀と答へし口に箔の付きたるを見て阿弥陀ぞと申す仏師の口よりもはや金色の光射しけり 〔頭興〕 〔人倫訓蒙図彙〕 仏師 釈迦仏御母摩耶夫人、功利天に御出生有る事をしらしめして、彼の天に上り、摩耶報恩経をとき給ふ。其の御留守のうち、仏を見奉らぬ事を嘆き、修達長者、毘首羯摩天に仏像を作らしむ。是始め也とかや。日本にて、聖徳太子の御時、大唐より鳥仏師と云ふ細工人来たり、太子に仕へ

奉り作りしを、太子の作と云ふなり。後、一条院の御時、定朝、江州坂本大宮に住する故、大宮形と号す。安元年中に、運慶と云ふ仏師あり。七条形の元祖なり。其の子旦慶、弟子康慶、同快慶、後安阿弥と云ふ。其の時、右の四人に四菩薩の官位を下さる。此の家筋は、四条通函谷鉾の町南側、康慶、今の左京是なり。其の外法橋数人有之。／ 経師 経師、或る説に、多田満仲の子美女御前に始まるとかや。諸の経巻、巻物、色紙、短冊、薄様、香包、其の外色絵の紙、贈経等、紙をもつて造る類、一切これを造る。其の中の長を大経師と号す。禁裏の御細工をなす。此の家、曆を改板して世上に出す。又、院の御用を勤むるを院経師と号す。大経師、室町通仏光寺通上ル丁、内匠、院経師、車屋町丸太町上ル丁、藤蔵也。曆は宣明曆を用ひたり。又、貞享年中に改め、大統曆を用ふ。唐にても代々曆を改むる事也。元来は黄帝の時に始まり、唐の一行阿蘭梨より詳しく発明す。日本へは、欽明の御時、百済国より渡す。泥絵書、諸の紙に下絵をなす。此の者、経師の下細工也。〔誹諧職人尽〕 仏師 光ささぬ内に拝むや雪仏△玄札△ 涅槃会や今日は仏師の恵美須講△蛙足△ 仏師の砥石はかなやくさの露△麦仙△ 法橋は山の出入りぞほととぎす△少我△ 箔散るや仏師の膝に飛ぶ螢△釵尺△ 雨雪とわれても一つ仏師かな△宜朝△ 箔散るや仏師の膝へ青嵐△南社△ 其の国は仏師の屑を落葉にも△道淡△ 仏師とは親の唐名や生身魂△寥和△ 経師 鶯の初音や経の一の巻△松一△ 説くぞ今四十九年の粘の花△寥和△ 〔今様職人尽百人一首〕 仏師 御仏の光輝く箔の色研ぐ小刀のはかのいづらん 「きよせがきつふ忙しいの」「あれはとつても飲むと使つてたまらぬ」「大分この頃はよい手間を取るげな」 大経師 経師ども屏風表具は多くとも身のかけはりを習ふべきかな 「はん兵へ、屏風が叶はぬは」〔彩画職人部類〕 経師 経工は、仏家に用ゆる所の諸経を製す。此の業をなす者、常に帯細工をよくす。故に、表具あるひは屏風、襖の類、或は色紙、短冊に至るまで、いつとなくこの業をなす者兼ねたり。実は、経師、表具工、張付工など、差別あるべきことなりとぞ。〔職人尽発句合〕 二十番 仏師・経師 雪仏夕日に融けて無一物 如是我聞鮫は食ふべきものならず 左の句は、よく聞こえたれど、仏師の作とも定めがたし。右は、如是我聞とうち出だしたる職分の心掛け深く、河豚を戒めしもさる事なれば、旁以為勝。〔職人尽狂歌合〕 仏師・経じ 仏つくる赤丹より我ほりするは子規なく卯の花の上 表具する釈迦の御画より妙なるは今出山の初郭公 左、万葉集に、仏つくる赤丹たらずは水溜まる池田の朝臣が鼻の上を掘れ、とあるを取りて、卯の花の上に取りなし、三句のほりするに、彫と欲を秀句にあやどられし、未練の判者、まばゆき心地し侍る。右、出山の釈迦、

いかにも尊く妙に侍り。いづれもおしなべたる歌にあらねば、いづれをよしとも心まどひて侍れど、などやらん、左の方のいささか勝りざまに思はるるは、例の古物扱ふ心癖にや侍らんかし。「妻と並びて、魚食ひつつ造りて候ふ。かくても此の

御仏の利益おはしましなや。おぼつかな」／ 仏師・経師 ほととぎす仏のお目と間違へて耳に入れつる玉の一声 骨し

ばり箕をかくれば郭公声張り上げて兩空になく 左、木像には玉眼といふ物あるを、それにはたがひて、耳に入れしと続けられし、をかしたぐひなく侍り。かうさまに狂したるをこそ狂哥とは申すべけれ。右、蓑と申されて、兩空と置かれし、首尾

よろしけれど、左ことに狂したるさま強く聞こえ侍れば、横坐は左の仏師にこそ譲り聞こゆべけれ。／ 仏師 御仏を作り

て耳に初声を入るるもおのがしよくの魂 ……右、職に蜀の響きを借りて、望帝の故事にあやなされし、めでたくたくみに聞こゆ。勝とぞ申すべき。／ 仏し ほととぎす仏を刻む小刀の横に走りてかけたかと鳴く ……右、横に走りてなどおかし。

すべて一首滞りたる事なきは、これもなほざりの口ききとは覚え侍らず。持とも申すべけれど、歌合に持のみ多からんは、す

さまじげに思ふ人も侍るべければ、しひて勝負を分かち侍る。一伏三仰の文字めづらしげに侍れば、(さいすりの歌) いささ

か勝りぬべくや。／ 仏師・仏師 仏師が子も八つの頃しも問ふて聞け天から降つたか初郭公 郭公造つてゐたる大仏の耳

の中から初声を聞く 右、大仏を造るほどならば、仏師は御頭の内へも入りてあるべし。さるときに郭公のなのりたらんには、

げに大仏の耳よりや聞くべき。此の哥、狂じたるさまなべてならず。左、つれく草の詞を取りて、歳の八を丑の時によそへ

られしもおかし。左右同等なる中に、右の大仏、いささか丈ち勝りぬべくや。／ 仏し 今朝はとく仏師も釈迦の御姿へ

箔をおき聞き時鳥 左右、あしたゆふべのたがひのみにて、心のおかしさはともに等しく侍れば、持と定むべくや。／

仏師・経師 数鳴きて声色とれば仏師屋の血をもはくかと聞く郭公 請け合うた掛物ならで三ぶくの夏もきぬ地と聞く時鳥

左、声の色に箔など続けられし、仏師にはさも侍りぬべし。おもしろく覚えて侍り。右、経師、利口し申されしさま、劣れ

りとも覚え侍らねば、勝負を定めず侍り。／ 仏師 空すけが一声よりも郭公聞きし仏師の門をかけ出す 左、人の目をま

く物あり。やう／＼、をう／＼と呼びたるにはあらで、郭公の声に門を走り出でたる仏師のさま、よく思ひ寄せられたり。…

勝負分きがたくこそ。／ 仏師・仏師 仏師屋の見せ先に鳴く郭公さが父に似た羅漢ありやと 造りなす五百羅漢の耳より

も輪をかけて鳴けやよ時鳥 左右とも等しき管みにて、心なべてならずおもしろく取り成されたり。勝負いづれとも分かか

て待る中に、右の方人にて申さば、左哥、仏師屋と申されし、此の頃のわらはべめきたるやう也。又、左の方人となりて申さば、輪をかけてなど申されし、聞きなれたる心地すとや申すべからん。されど、題の心にとりては、とり／＼に興ありて侍れば、等しく持となして、勝負を分かず侍り。／ 仏師・仏師 来迎の弥陀つくればか細工さへ上の空にて聞くほととぎす誕生の釈迦彫りかけて郭公仏師も空に指さして聞く 左、心おかし。右もよろしげに聞こゆ。但し、勝負は左を勝ると申すべくや。〔江戸職人歌合〕十九番右 経師 海山の眺めも月のすみ絵にて天地は天地大表具せり ……左申云、天地は天地、何事にか侍らん。陳云、天地をもて表具の天地にしたりと也。判云、……右、月の前の海山を一幅の画図にして、天地をもて表具したる、見所限りなし。尤も勝とす。 変はらじとかけて誓ひし帛表具離れ離れの中をことわれ ……左無申旨。判云、……右、かけて誓ひし帛表具、いとめでたう承り侍り。勝たるべき条勿論歟。〔今様職人尽歌合〕 経師 蓑かけむ涙の雨のふる屏風やつれし恋に骨縛りして 大経師の醬粉は古きを用ひ、俳諧哥の趣向は新しきをよしとすとかや。恋やつれの骨縛りして、涙の雨に蓑かけんといへる、刷毛の舌先奇妙に回りをめづらし。……並べて一雙の蝶つがひ、偶合よろしければ、右も左も合点／＼に及べり。〔片手に割麦は商へども、日ごとの麦飯にはあきたく候ふ〕／ うち続く雨に表具も干しながら口に糊する手立てだになし／ なりはひも今宵休みて唐紙のきらびやかなる月を見るかな／ 裏打ちし大磐若にも猶まして妹が返事ぞよき功德なる／ 刷毛持ちて袋も蓑も貼るものを宝なき身と人な見下げそ／ 幾たびも書き損ねたる文殻に恋の下張りするばかりなり 〔近世職人尽絵詞〕 仏師 日本書紀敏達六年に、百済国王献造仏工事見ゆ。本朝仏師の祖は康高といふ人也。光孝帝の裔にて凡僧たり。後、東山清水寺の別当となる。仏師の綱位は定朝に始まる。定朝第六世を運慶といふ。その子湛慶。父子ともに日本の妙手なり。京大仏師左京は康助の裔也とぞ。〔二王の玉眼によき黒水晶もがな〕「目黒の三仏堂の本尊は、手本にしてよきぞ」〔略画職人尽〕 暑き日や羅漢刻みて居る人に肌脱ぐも有り眠るのも有り／ 行く鳥のあとや経師の一刷毛に霞に籠もる下張りの文字 〔宝船桂帆柱〕 仏師 精出して仏造れば不自由なく極楽なりし身こそ楽しき 〔仏造つて魂を入れるは、実に仏師だ。ああ恐るべし／＼〕／ 大経師 正直のその蓑貼りの楽しさは家の風さへ袋貼りなり 〔紙を自由にするとはきつい〕

【本文】

廿六番

しはしまてつくりかけたる木ほとけの

ひかりそふへきゆふくれの月

かまくらや経師かやつにつきみれば

うら□まかけてすみわたるかな

左哥、みかきかけたるといひてこそ、光そふは

かなふへけれ。右、経師か谷、もし浦山かゝら

すは如何。しはらく可為持。

もし我にいたきやあふと聖天の

ことくにひとをつくりなさはや

わか恋はふりたるきやうのすりかた木

た□まかちにもなりにける哉

左、あまりにもとめたるすかた見くるし。

右、いますこしまさるへくや。

仏師

阿弥随のさう、まつ

れんけさをつくり候。

おりふし法師はら

たかひて、手つから

つくりかけたる―〔類〕造かけたる

ひかり―〔類〕光 ゆふくれ―〔類〕夕暮

つき―〔類〕月

うら□ま―〔尊〕〔白〕〔忠〕〔明〕うらやま〔類〕浦山 すみわたる―

〔類〕澄わたる

ひと―〔類〕人

わか恋―〔類〕我恋

きやう―〔類〕経

た□まかち―〔尊〕〔白〕〔忠〕たえまかち〔明〕たえまがち〔類〕絶まか

ち―〔類〕成にける哉

なり―〔類〕成にける哉

仏師―〔忠〕廿六番 仏師

阿弥随―〔類〕阿みた まつ―〔明〕〔類〕先

れんけさ―〔白〕〔忠〕蓮花座 つくり候―〔白〕〔忠〕造候

おりふし―〔白〕〔忠〕折節 法師はら―〔白〕〔忠〕法師原

たかひて―〔白〕たくひて〔忠〕たくひて

仕候。

経師

此巻きり、

いかに

したるにか、

きりめの

そろはぬ。



此〔類〕この

きりめー〔白〕〔忠〕きり目

そろはぬー〔尊〕〔明〕〔類〕そろはぬよ〔白〕〔忠〕そろわぬよ

【語注】

◎仏師は、仏像を彫る職人。法橋、法眼、法印などの僧綱位を得る者もあり、寺院との関係が深かった。

経師は、経巻の表装をする職人。後には、書画や屏風、襖などの表装を兼ねるようになり、表具師の呼称となった。

五番本『東北院職人歌合』の判者として「経師」、十二番本『東北院職人歌合』二番に、「仏師」、「経師」が登場する。また、「経師」に近いものとしては、『三十二番職人歌合』九・二十五番に、「表楯師」が登場する。

◎しはしまて…… 『飛鳥井雅康 職人歌』十二番左、仏師の歌に同じ。

◎しはしまて 「夕暮の月」の出るのを、しばし心待ちにせよ、というのであろう。あるいは、すでに出ている月に木仏が「光添ふ」(次項参照)のを待て、と解すべきかもしれない。新日本古典文学大系『七十一番職人歌合 新撰狂歌集 古今夷曲集』(以下、『新大系』と略す)は、「(月よ、出ることを)しばらく待て」と解するがいかがが。

◎木ほとけのひかりそふへきゆふくれの月 「光(を)添ふ」は、「光添ふ木の間の月におどろけば秋もなかばのさやの中山(八家隆)▽」(新勅撰集、十九、雑歌四)のように、単に、あるものが光を増す意で用いられる場合と、「濁りなく千代を数へて澄む水に光を添ふる秋の夜の月(平兼盛)▽」(後拾遺集、四、秋上)のように、あるものが他のあ

るものに光を添える意で用いられる場合とがあるが、ここは後者の場合に当たろう。木仏がより一層光を添えるであろう夕暮の月。「しばし待て」を、すでに出ていた月に木仏が「光添ふ」のを待て、の意と解するならば、実際には月が中天に上って一際明るくなる（前者の意の「光添ふ」）のであるが、それを木仏のせいだと見立てたことになる。

◎かまくらや…… 『飛鳥井雅康 職人歌』十二番右、経師の歌に同じ。

◎かまくらや 「や」は、和歌の初句にしばしば用いられて、場面を提示する詠歎の助詞。

◎経師かやつ 「経師ヶ谷」の位置については、『吾妻鏡』建長五年十二月二十二日条に、「丑剋、経師谷口失火、北風頻扇、余炎迄浜高御倉前、焼死者十余人」とあり、その位置が推定される。『鎌倉志』、『攬勝考』に、弁ヶ谷の北『新編相模国風土記稿』に、比企ヶ谷に続く谷とし、長勝寺の東方の谷と考えられる。小田原北条時代には、宗旨未詳の尊養院があった（日本歴史地名大系14 神奈川県地名「経師ヶ谷」の項）。経師の縁でこの地名を出した。

◎うら□まかけてすみわたるかな 「うら□ま」は、他の諸本は「うらやま」、ないし「浦山」。浦も山も両方にかけて、月の光に澄み渡っている、というのである。「浦」に紙の「裏」、「澄み」に「墨」を掛けるか。

◎みかきかけたるといひてこそ、光そふはかなふへけれ 「造りかけたる」ではなくて、「磨きかけたる」と言っている。こゝ、「光添ふ」という言葉は生きてくるであろう。

◎経師か谷、もし浦山かゝらずは如何 未考。経師ヶ谷から浦と山とが同時に見渡せない、そういう地形であったら、この歌はいかがなものであろう、の意か。

◎もし我にいたきやあふと 「に抱き合ふ」という言い方は普通でないと思われるが、私に抱きついて来る、という気持ちを含めたのであろう。つれない相手であるが、それでももし私に抱きついて来て相抱擁することもあろうかと。「抱き合ふ」という言葉自体、勿論、通常歌に用いる表現ではない。

◎聖天のごとくにひとをつくりなさはや 「聖天」は、正しくは、大聖歓喜天。歓喜天とも略す。仏教の守護神の一。その形像は、象頭人身の男女二天が抱き合った姿で表される（別に、単身の像もある）。その形から、わが国では、

男女和合、子授けなどの功德があるとされる。聖天の像を造るように、つれない相手を意のままにしたい、というのである。

◎わか恋は…… 「我が恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一。五番語注「わが恋は」の項参照。

◎ふりたるきやうのすりかた木 「摺形木」は、版木。この語は、五番本『東北院職人歌合』の判者、経師の歌や十

二番本『東北院職人歌合』二番右、経師の月の歌にも、「摺形木なる秋の夜の月」、「ちびはてて文字形もなき摺形木」と見える。古くなって磨滅した経の版木。

◎た□まかちにもなりにける哉 「た□ま」は、他の諸本、「たえま」ないし「絶ま」。磨滅した版木で刷った文字が途切れ途切れになるように、相手との関係が途絶えがちになった、というのである。

◎あまりにもとめたるすかた 「余りに求めたる」は、「ヨキ詞ヲ続ケタレド、求メタルヤウニナリヌルヲバ、又失トスベシ」(無名抄、俊恵歌スガタヲ定ル事)、「み山のあられ過ぎつらん秋風の通ひ路、はるかに思ひやられてをかくは待るを、分け過ぎてと待る詞ぞ、少し求めたるやうに聞こえ侍る」(千五百番歌合、七百七十二番判詞)のごとく、作意が過ぎて不自然な感じのすること。それに、露骨に肉體關係を求め意を掛けるか。「姿」も、歌の姿の意に、男女合体の姿の意を掛けるのであろう。

◎れんげさ 蓮の華をかたどった、仏像の台座。

◎法師はらたかひて 仏師は法橋・法眼・法印などの僧綱位を称することがあったので、「法師」は一般の下級の職人、ここでは弟子のことを言ったのであろう。「ばら」は、人を表す名詞に付いて、複数の意を表す接尾語。軽蔑したニュアンスで用いられることが多い。「たかひて」は、白石本は「たくひて」とするが、「たかひて」の誤写であろう。忠寄本は「く」の右に「か」と校合。「違ふ」は背く意で、弟子どもが反抗したというのであろうか。

◎手つから 直接自分の手で。

◎巻きり 未考。巻物の両端を切る刀か。『中世職人語彙の研究』は、『日本国語大辞典』を引いて、「巻物の小口を切り揃えること」とする(「まきぎり・まきだし」の項)。

◎きりめのそろはぬ 「そろはぬ」は、他の諸本、「そろはぬよ」または「そろわぬよ」。経巻の両端の切り目が揃わぬというのであろう。

【絵】

仏師は剃髪し、僧衣を着、袈裟を掛ける。僧綱領（僧綱の位の者が、襟を折らずに、立てたまま着る着方）にしてゐるのは、この仏師が僧綱位を称していることを示すのであろう。四角い台の上で、左手に蓮華の一弁を持ち、右手の小刀で細工しているところ。台の左に、蓮華三弁と手斧、鑿、小槌、鋸。台の右（向こう側）に小刀二本。明暦板本は、台の左の蓮華三弁を落とす。

経師は剃髪し、僧衣を着、両手で経巻を持ち、仕上がり点を検している体。前の台の上に、経巻二巻と、巻物を切るためと思われる小刀。明暦板本、類従本は、台の上の経巻と小刀の描き方に小異があり、経巻用の紐を描き添える。白石本、忠寄本は、台の上に経巻三巻と折本らしき物一冊、定規らしき物一本。台の手に小刀二種。

【参考】

○昔、運慶、湛慶、安阿弥陀仏と申して仏師があつた。はや、運慶も湛慶の子孫も絶へて、安阿弥陀仏の子孫斗、今の世に残つた。則ち某じや。
（天理本狂言「仏師」）

○おや、地蔵ヲ見スル。アト、扱々作つたト云テ褒メテ、面相ヲイロウテミテ、不思議や、面相が温かなト云。おや、（おや）なんぢもあらう。お面相を今彩色（さいし）いた。膠が干ぬト云。アト、箱に入れて持たうかト云。おや、（おや）さう思召す。ただ負わせられいと云。アト、畏まつたト云テ負ウ時、柔らかで、そのまま人のやうなト云。おや、（おや）さうあらふず。最前申すごとく、安阿弥の子孫であるによつて、身どもから仏の内じやによつて、木仏のやうにはあるまゝいと云。
（天理本狂言「金津地蔵」）

○最前も申すごとく、某は大仏師じやに依つて、弟子をあまた持つた。明日の今比でかすは、丈何尺の仏を請け取つ

たが、急ぎじゃ程に作つて来ひと言へば、御頭みづかぶは御頭、お手はお手と、面々に作つて来るを、某が膠をまんまと解きすまひて、ちよつ／＼／＼と付けてまいる分じやに依つて、明日の今比にでくる。又、急ぎでなければ、某が一細工に致すに依つて、来年の今比ならではできまらせぬよ。
(虎明本狂言「仏師」)

○われらの書物は折り重ねて紙で綴じてある。仏僧らのは巻物であり、紐でくくつてある。
(日本覚書、五)

○われらの聖像は、大部分が描かれた祭壇画である。仏僧らの寺院ゴブツでは、すべての聖像は彫像である。
(同)

○われらは聖像にさまざまの色彩を用いる。彼らはその聖像をすべて上から下まで金で塗る。
(同)

○われらの(聖像)は、すべて人間の身長にあわせて作る。彼らのあるものは非常に大きくて、まるで巨人のようである。
(同)

○われらの(聖像)は、美しく、また信仰心をたかめさせる。彼らのは、火中で焼かれる悪魔の形をしており、醜悪で恐怖の念を起こさせる。
(同)